

代表からのご挨拶

サンライズ・メイト・バート株式会社

代表取締役 井上 明美



いつも皆様方には、格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。先日4団体統一スーパーバンタム級タイトルマッチ12回戦が開催されたのは皆様もご存じだと思います。団体統一スーパーバンタム級王者井上尚弥氏が聖地ラスベガスで世界戦11連続KO勝利を挙げ、WBA世界同級1位ラモン

・カルデナスの挑戦を受け、8回TKO勝ち。「褐色の爆撃機」と呼ばれた元世界ヘビー級王者ジョー・ルイスが1948年6月にマークした世界戦通算KO記録を抜き、約77年ぶりに世界新記録を更新致しました。自身のプロデビュー30連勝という区切り勝利でもあったとの事。まさかのダウンした時に凍りついたのは私だけではなかったと思いますが日本人として誇らしい勝利でした。これから長雨の季節、昨今、皆様もお体に気をつけてください。

サンライズの物語

支え続けた10年の想いが導いた結末——

親子の愛が紡いだ物語



その方は、娘さんと二人暮らしで認知症に罹患され徐々に娘さんの事も理解されなくなった方でした。

私に関わらせて頂いた当初は介護拒否が酷く娘さんが自宅で入浴をさせても裸で洋服を着ようとしないかったり、路上で座り込んだり、デイやショートからも利用を断られ娘さんが途方に暮れた状態でした。

そんな中現在の担当医とめぐり逢い、このままでは娘さんが潰れてしまうと言われ落ち着く内服薬を処方されてからは落ち着かれ、デイやショートを利用しながら自宅で介護をされておりました。

以前私が訪問すると娘さんが排泄介助の最中でした。娘さんが「お母さん、気が付かなくてごめんね。」と何度も何度もお母様へ謝っていたのです。お母様の発語が無くなった事もあり、娘さんが排泄の時間を察してトイレへ誘導していたのです。そんな姿を目のあたりにして私は涙が零れました。

娘さんからお母さんはいつも私を助けてくれた。恩を忘れたことはない。だから今、私は母を助けたいのと言われていた言葉が胸に刺さりました。

そんな時突然に誤嚥性肺炎に罹患され緊急搬送されてしまったのです。担当医からは、胃ろうか中心静脈栄養にするしかないと言われたのです。

娘さんから相談を受けた時に、娘さんから「母を抱きしめてあげたいの」と言われ二人で泣き出してしまいました。「私から申し上げる事はなにもない。娘さんがどんな判断をしたとしても間違いではないですよ。正解ですよ。」と言うのが精一杯でした。

後日娘さんから連絡があり。「母はきれいな体のままで見送りたい。母は一生懸命に生きてきました。母も生きるのに疲れたと思う。また私もこの10年間できる限りの介護をしてきたので、何があっても後悔はありません」と決断されたのです。

生き続けることは大変な事だと思います。そして最終的な決断を出す事も断腸の思いだと思います。そこには親から受けた恩や尊敬が一杯に詰め込まれていたのだと考えます。



6月カレンダー工作

折り紙でメロンを作り画用紙に貼り付けて作りました。



NEWS 今月のニュース

広がる介護ロボット・ICT活用、現場の負担軽減に期待

深刻な人手不足や重労働が続く介護現場を支える切り札として、介護ロボットやICT（情報通信技術）の活用が進み始めている。政府はテクノロジーの力で介護サービスの質向上と介護職員の負担軽減を図る方針を掲げ、2025年4月から「介護テクノロジー」として重点開発・導入分野を従来の6分野13項目から9分野16項目へ拡大した。新たに「機能訓練支援」「食事・栄養管理支援」「認知症の生活・ケア支援」の3分野が追加され、排泄予測デバイスや摂食嚥下を助ける機器、認知症高齢者をサポートするシステムも対象となる。政府はロボット技術とICTの両輪で介護現場の課題解決を推進する方針だ。介護ロボットの代表例は移乗支援ロボットや見守りセンサー機器。移乗支援ロボットは要介護者をベッドから車椅子に移す際の持ち上げ動作を補助し、介護職員の腰痛リスクを大幅に減らす効果がある。装着型

の Powersuits も実用化され、多くの施設で導入が進む。また認知症高齢者の見守りには、天井やベッド周辺に設置したセンサーで動きを検知し、転倒や徘徊の兆候があればスタッフに通知するシステムが使われている。夜間巡回を効率化し、事故防止にも成果が上がっているという。

（中略）ICTでは介護記録の電子化やケアプラン作成支援ソフトが普及。タブレット端末で入力した情報がクラウドで共有され、スタッフ間の情報共有が円滑になる。AIを活用したケアプラン支援ツールも登場し、経験の浅いケアマネジャーの支援や質の均一化に役立つ。国は介護ロボット導入に補助金を用意し、中小事業者でも手が届くよう支援。重点分野の機器開発企業への助成も手厚い。排泄を予測する「排泄予測デバイス」は利用者の尊厳保持と介護負担軽減に効果的で、介護職員からは「夜勤が楽になった」との声もある。一方で導入には機器購入や維持費、

研修が必要で「人のぬくもり」を機械が代替できない課題もある。異常検知後は人が駆け付ける必要があり、人員削減の決定打にはなりにくい。利用者の中には機械に抵抗感を示す人もいる。

（中略）現場の声は「ロボットやICTは補助であり、人間のケアを高めるためのもの」が多い。ルーティン業務が省ければ利用者に向き合う時間が増え、好事例も報告されている。見守りシステムで夜間休憩がとれ、日中に優しく接する余裕が生まれたという。介護ロボット・ICT活用はまだ始まったばかりだが、可能性は大きい。超高齢社会の課題に人とテクノロジーの協働で挑み、国の後押しも追い風に現場発の工夫で困難を乗り越えることが期待される。

<介護ジャーナル
2025/5/12（月）>

広報誌「ライジング・サン」のバックナンバーは、弊社ホームページでもご覧いただけます。

ぜひお立ち寄り下さいませ。 <http://www.samaba.jp/back-number/>